

大山崎はフェンシングのまち

昭和 63 年（1988 年）に開催された京都国体において、大山崎はフェンシングの大会会場となりました。以降、選手の強化に力を入れるなど、数々の大会を開催し、オリンピック代表選手を輩出するまでに至りました。そして平成 17 年度（2005 年）に、国が小・中・高校生スポーツ大会の「聖地」づくりを目指す「スポーツ拠点づくり事業」において、大山崎は「全国少年フェンシング大会」の開催地として選ばれました。以降 10 年間にわたり、天王山の合戦の地で熱い戦いが繰り広げられます。



全国でも珍しい三川合流

大山崎は桂川・宇治川・木津川が合流して淀川となる「三川合流」の地でもあります。「三川合流」は岐阜県の本宮三川合流などありますが、自然の姿で合流しているケースは全国的にも珍しく、そのスケールはまさに雄大であります。

延暦 3 年（784 年）長岡京ができた頃、山崎津という港が造られ、水運が栄えました。しかしながら、大山崎は洪水の被害に遭うことが多く、これまで幾度も治水工事が繰り返されてきました。明治に入って木津川の付け替え工事がおこなわれ、昭和 5 年の工事で現在の三川合流の姿となりました。

三川合流は「旗立松・展望台」の他、宝寺（宝積寺）から少し登った「三川合流展望台（青木葉谷公園）」からもご覧いただけます。気象条件が良ければ大阪城まで見ることが出来ます。



水辺・河川敷で遊ぶ

川や水辺は子供たちにとって、生き物の生命の大切さや水の恐ろしさ、楽しさなどを学ぶフィールドであります。しかしながら、子供たちが魚やザリガニ、サワガナなどを捕まえて遊ぶ場所が大山崎でも減りつつあります。現在、円明寺にある小倉神社の横を流れる久保川は、自然に近い状態で残され、ホテルも見ることが出来ます。同じく円明寺の小泉川は、京都府の整備によって、住民が水辺に親しめる環境となっています。ここにもホテルが生息しています。

また、河川敷には、大山崎町が管理する「桂川河川敷公園」と国が管理する「淀川河川公園」があります。「桂川河川敷公園」(<http://www.town.oyamazaki.kyoto.jp/>)には芝生広場があり、野球場、テニスコートは、有料にて利用できます。(受付は大山崎町体育館 075-956-0567) 「淀川河川公園」(<http://www2.kasen.or.jp/>)にも芝生広場、ストリートバスケケット、ピクニック広場があり、野球場、フットサルコートは有料にて利用可能です。(受付は河川環境管理財団 鳥飼サービスセンター 072-654-9800)

大山崎が登場する文献

- 信貴山縁起絵巻 ■土佐日記 ■井上靖「獵銃」 ■谷崎潤一郎「葦刈」 ■司馬遼太郎「国盗り物語」
 - 御石芳枝「山崎橋物語」(2005 年 5 月 新風舎より出版 840 円) など
- 「大山崎ふるさとガイドの会」で活躍される御石さんが出版された歴史小説、幻想小説、伝奇でもある小説です。



山崎橋から天王山大橋へ

奈良時代の神亀 2 年（725 年）8 月、高僧・行基が弟子を連れて山崎の里を訪れました。淀川のほとりに着くと渡し舟が見当たりません。行基は川面に立つ大きな一本の柱を見つけました。里人の話では、その昔、この地に橋が架けられることになり、当時の風習では、いけにえとして人柱を立てなければならなかったとのこと。そして、人柱に美しい茶屋の娘が選ばれました。白羽の矢を立てられた娘は「私の命で神の心がやすらぎ、無事橋がかけられるならば」と、川底に身を沈めました。その後、度重なる大水で橋は流され、大きな柱だけが一本残りました。

その話を聞いた行基は、すぐに橋づくりに取り掛かりました。そして、その橋は「山崎橋」と呼ばれ、多くの人々にとって欠かせない橋となりました。橋は十一世紀には廃絶し、豊臣政権下で一時的復活したといわれていますが、今日まで再建は行われていません。平成 15 年末の京滋バイパス～京都第二外環状道路の開通と同時に側道の国道 478 号が開通しました。そこには新たな橋が架けられ、「天王山大橋」と名付けられました。これまでは、川を渡るには淀の宮前橋、枚方大橋を利用するしかなく、渋滞に悩まされていましたが、念願の「天王山大橋」の開通により、住民は大変便利になりました。車での利用の他、花見時には対岸の背割堤（八幡市）まで自転車やウォーキングで橋を渡る方もおられます。「山崎橋」のお話は、大山崎町商工会並びに大山崎ふるさとガイドの会のホームページにて紹介しています。

※ 八幡市にある背割堤は、木津川と宇治川の間で、桜の名所として知られています。昔は、大山崎山荘（現アサヒビール大山崎山荘美術館）の所有者であった加賀正太郎氏が天橋立をイメージして、山荘のバルコニーから見えるように松を植えられていたそうです。因みに大山崎山荘は、加賀氏がイギリスのウィンザー城から眺めたテムズ川に思いを馳せ、自ら設計されました。

三つの渡し舟

昔、対岸の八幡市とを結ぶ渡船場が三つありました。きつねの渡し、広瀬の渡し、そして山崎の渡しで、土地柄いづれも古い歴史を持っています。しかし、それらは明治末期からさびれ、やがて次々と姿を消していき、今はわずかに古老の語り草となっています。渡し舟は、石清水八幡宮（八幡市）へのお参りや当時、遊郭で賑わった橋本（八幡市）への交通手段としても利用されました。山崎の渡しは、きつね、広瀬の渡しがなくなってからも存続し、戦後しばらくの間もありましたが昭和 37 年に廃止となりました。大山崎町商工会青年部では、平成 16 年度に「渡し舟復活プロジェクト」を立ち上げ、様々な調査研究に取り組みました。しかしながら、予想以上に川の水深が浅いこと、船頭、舟の確保の問題があり、希望を抱きながらプロジェクトは暗礁に乗り上げたままとなっています。昔の「渡し舟」のお話は、大山崎町商工会並びに大山崎ふるさとガイドの会のホームページにて紹介しています。



竹／竹の子でも有名です

大山崎は向日市、長岡京市とともに乙訓の竹・竹の子の産地としても知られ、シーズンに収穫された竹の子は老舗料亭などに出荷されます。しかしながら、後継者不足により竹林の整備が行き届かず、荒れた竹林が目立つようになってきました。大山崎には「竹林ボランティア」という任意団体があります。竹林の所有者の了解を得て、荒れた竹林を整備し、景観と山の保全に積極的に取り組んでおられます。また、平成 17 年（2005 年）3 月には、京都府・大阪府・大山崎町・大阪府三島郡島本町・サントリー(株)が学識経験者、地域住民らとともに「天王山周辺森林整備推進協議会」を設立されました。この協議会では、京都と大阪にまたがる天王山周辺（約 250ha）の森林を、行政・学識経験者・所有者・地域住民・ボランティア・企業等の関係者が、行政区域を越えて協働・連携して保全・整備に取り組んでいます。この構想は、環境問題から災害防止、教育に至るまで多様な効果を生み出します。



竹の子の販路を開拓した三浦芳次郎

竹の子が食用となったのは、江戸時代の末期の頃といわれています。天保 3 年（1832 年）に大山崎で生まれた三浦芳次郎氏は、明治になって、生産過剰となった竹の子を全国に普及しようと、京都・大阪にとどまっていた販路を各地へ拡大しました。その結果、竹の子の生産は安定し、窮地に立たされていた農家からも大いに感謝されました。円明寺を流れる小泉川に架かる小泉橋には、三浦氏の偉業を後世に伝えるため地元有志らによって明治 36 年（1903 年）に碑が建てられました。このことは、大山崎町商工会並びに大山崎ふるさとガイドの会のホームページにて紹介しています。



歴史的建築物が豊富！建築家も来られます

千利休が唯一造営したといわれる国宝・待庵（妙喜庵）は、畳二畳の極小の空間で、まさに建築の奥義であります。大正から昭和初期に建てられたアサヒビール大山崎山荘美術館は、国登録有形文化財となっています。また、同美術館の“地中の宝石箱”は安藤忠雄氏が設計され、この他にも、安藤氏が初めて手掛けられた介護老人福祉施設の“洛和ヴィラ大山崎”も大山崎にあります。広島県福山市に生まれ、竹中工務店を経て京大建築科の教授となった藤井厚二氏は、大山崎に広大な 1 万坪の土地を購入し、10 年間に自邸を 5 回建築する実験を繰り返しました。そのうちの一つの住宅は、日本の近代建築 20 選にも選ばれています。この他、地域内には数は減りましたが、明治に建てられた築 100 年以上の古い民家が残っています。大山崎町商工会女性部では、古い民家を活用し、手作りの和小物のショップ「ららん」を年に数回、試験的にオープンしています。古民家が日本の文化として残るように作家の工房やギャラリーなど様々な利用方法を提案したいと考えています。

鎌倉初期に円明教寺を取り込んだ広大な山荘「円明寺山荘」が建てられました。その庭園の池と伝えられている「お茶屋池（別名：九条池）」は、今も農業用水池として残り、当時の風光明媚な様子を伝えています。

年末はイルミネーション・ミュージアム

大山崎町商工会青年部では、平成 11 年（1999 年）より、「大山崎オーキッド・イルミネーション」を JR 山崎駅前、阪急大山崎駅前において年末に開催しています。住民参加型のイルミネーション・コンテストも同時開催し、優秀賞には現金 5 万円が贈られます。また、日本のウィスキーのふるさと、「山崎」で有名な「サントリー山崎蒸溜所」においても、平成 16 年（2004 年）よりイルミネーションがスタートしました。毎年、年末はエリア内において、華やかなイルミネーションをお楽しみいただけます。



「大山崎ふるさとガイドの会」が大活躍

大山崎には、ボランティアで名所・旧跡を案内（無料）していただける「大山崎ふるさとガイドの会」があります。この「大山崎まるごとミュージアム・ガイド」の編集にも多大なるご協力をいただきました。思い出に残る大山崎のガイドをご希望の方は、下記の大山崎ふるさとガイドの会のホームページをご参照下さい。<http://www007.upp.so-net.net.jp/ofg/index.htm>



大山崎はかつて蘭栽培のメッカであった…

大山崎山荘を建造した加賀正太郎氏は山荘の温室で、世界各地から取り寄せた蘭を交配し、新種を含め 1140 種類の蘭を栽培しました。山荘は西日本の蘭栽培のメッカとなり、「蘭屋敷」とも呼ばれていました。加賀氏は昭和 21 年（1946 年）、育てた蘭の優良種を「蘭花譜」という 104 点の版画を中心とした画集にまとめました。大山崎町商工会青年部では、加賀氏の功績を広く PR するため、平成 13 年度より「蘭のまち再生事業」に取り組み、「蘭花譜展」や黒崎良古氏（黒崎氏は山荘で開花した蘭を現在も保有されています。）、大山崎洋蘭会の方が栽培した蘭を展示する「蘭展」などを開催しました。平成 18 年 2 月には、NHK の「世界らん展日本大賞 2006」にもテレビ出演しました。



まだまだあります！大山崎に伝わる民話

この他にも、大山崎に伝わる民話等はたくさんあります。こちらで紹介しきれない民話等は、下記の大山崎町商工会並びに大山崎ふるさとガイドの会のホームページでお楽しみ下さい。<http://oyamazaki.kyoto-fsci.or.jp/>
<http://www007.upp.so-net.net.jp/ofg/index.htm>

- 蛇姫池のたたり ■大山崎と新撰組（十七士の墓）
- 打出と小槌（“打出の小槌”ではありません）
- 酒づくりの神様（酒解神社）
- 油の神様（大山崎は荏胡麻油の発祥の地です。現在、荏胡麻は健康食品として注目されています。） など



編集・発行：平成 18 年（2006 年）2 月

大山崎町商工会青年部／大山崎町商工会女性部

〒618-0071 京都府乙訓郡大山崎町松原 38
TEL 075-956-4600 FAX 075-956-4601
E-mail oyamazaki-sci@kyoto-fsci.or.jp
URL <http://oyamazaki.kyoto-fsci.or.jp/>

※ 編集にあたり、大山崎町、大山崎町教育委員会、大山崎ふるさとガイドの会にご協力いただきました。

